

## 2010 年度・研究旅行奨励制度 【グループ旅行】

<b>名 前</b>	立石 知里, 徳永 悠 森 紫央里, 萩野 葉	<b>研究テーマ</b>	ベラスケス不朽の名作 『ラス・メニーナス』の真意を迫及する
<b>目的地</b>	<b>国 名</b>	<b>地域・都市名</b>	
	スペイン	マドリード, セビリア	

### 研究旅行の目的

スペインの画家ディエゴ・ベラスケスの名作『ラス・メニーナス』は極めて難解な作品だ。その主題は一体何なのか、現在でも見解の一致に至っていない。ベラスケスのこの同じ作品に興味を抱いた私たちは、その作品解釈について議論するなかで、制作者であるベラスケスがキャンパスに向かう姿で画中に登場している点に、この絵の最大の謎が隠されているのではないかと考えた。すなわち、画面奥の鏡に映る姿でその存在を示しているのはフェリペ4世とマリアナ王妃夫妻で、作品中央に描かれているのがマルガリータ王女なのだが、画中のベラスケスが描いているのが国王夫妻なのか王女なのか、それが不明なのだ。この謎と疑問から出発した私たちが辿り着いたひとつの仮説は、『ラス・メニーナス』は紛れもなくベラスケス自身の自画像であったのではないかと、というものであった。つまり、この作品の解釈のためには、制作者である画家が自らをどのように捉え描いたかという、一種の哲学的視点が必要ではないかと考えたのだ。

このような視点から『ラス・メニーナス』研究をさらに深めていくために、この研究旅行の実施が不可欠である。問題の作品を実際に現地に赴き直接観察しながら分析すること、この作品についての様々な文献やさらなる情報を現地で収集すること、そして、ベラスケスの他の作品との比較検討を試みること、これらが本研究旅行の主な目的である。

### 期待される成果

私達は虚像を通じてでしか自身を見つめることができない、つまり、自画像とは虚像を介しての自己の探求に他ならないと考えている。『ラス・メニーナス』がベラスケスの自画像でもあるとすると、国王夫妻がいる側つまり鑑賞者の位置に鏡があるのか、画の中にはどこかしらにベラスケスの映った鏡が存在しているはずだ。画中のベラスケスの頭の中には直接見ることでできない透明な鏡があり、それに反射した自分を描いているのか、考察余地は十分にあると思う。

また、ベラスケスとほぼ同時代の哲学者であるライプニッツは、世界をそれぞれの位置から表現するモノドを「生きた鏡」と呼んだ。このような哲学史的な背景を考慮に入れながら、『ラス・メニーナス』を歴史的観点、技術的観点、鏡の効果、哲学的観点の4つの視点から調査、考察し、そしてまた、作品が所蔵されているスペインのプラド美術館を実際に訪れて実物を見たり、その他のベラスケスの作品、さらには有名・無名作家を含めた多くのスペイン絵画を広く観察したりしたいと考えている。そうすることで、「鏡」の存在から考えられる「自己探求」についての考えがより一層深まり、かつベラスケス

の表現の独自性をより深く追求することができ、『ラス・メニーナス』の真意に一步でも近づけるのではないかと思っている。

旅行日程		
旅行期間： 2010年8月27日～9月5日 [ 10日間 ]		
第1日目 8月27日	福岡 カイロ	移動：福岡→関西国際空港→ルクソール→カイロ
第2日目 8月28日	マドリード	移動：カイロ→マドリード
第3日目 8月29日	マドリード	プラド美術館訪問
第4日目 8月30日	マドリード	ソフィア王妃芸術センター訪問 王立サン・フェルナンド美術アカデミー訪問
第5日目 8月31日	マドリード トレド	移動：マドリード→トレド エル・グレコが愛した町トレド訪問
第6日目 9月1日	トレド セビリヤ	移動：トレド→セビリヤ
第7日目 9月2日	セビリヤ	ベラスケスの故郷セビリヤ訪問
第8日目 9月3日	セビリヤ バルセロナ	移動：セビリヤ→バルセロナ 午後：個人旅行
第9日目 9月4日	バルセロナ	午前：個人旅行 移動：バルセロナ→カイロ→ルクソール
第10日目 9月5日	ルクソール 福岡	移動：ルクソール→関西国際空港→福岡

#### 【まとめ】

私たちは、今回の研究旅行で、ベラスケスの名作『ラス・メニーナス』の真意を追求するためにスペインの地を訪れた。『ラス・メニーナス』に対する解釈は複雑難解なもので、解釈の仕方も様々である。今回、私たちは、参加メンバーそれぞれの視点とアプローチを大切にしながら、同時に、それを皆で討議するという方法で研究対象の分析を試みた。すなわち、プラド美術館で本物の作品『ラス・メニーナス』を目の前にしながら、グループメンバーそれぞれの知識や観方をもちよって、作品に対する解釈や謎を直に話し合うことができた。これが、今回のグループによる研究旅行の何よりのメリットであった。また同時に、事前に英文の文献や解説を協力して読解したり、作品の感想や疑問を討議したり、お互いに自分の考えや意見を率直に話し合うことで、更なる興味深い謎や新しい発見を見出すことができた。美術館ならではの緊張感の中で目の当たりにした多くの絵画は、間違いなく私たちの

感性を刺激し、また、研究対象への新たな解釈や発見を生んだ。

立石知里（グループ代表）



ディエゴ・ベラスケス『ラス・メニーナス』（女官たち）  
プラド美術館所蔵

### 【報告書①】

「ベラスケス不朽の名作『ラス・メニーナス』の真意を追究する」

立石 知里

私達は研究テーマを「自己探求」とし、そのひとつの表れとして画家達が描く自画像に着目した。その中でも研究の題材とした『ラス・メニーナス』は17世紀バロック期のスペイン画家ディエゴ・ベラスケスの最高傑作で、この作品に秘められた「自画像を描く」というベラスケスの自己探求は哲学的な視線を向けことによって、初めてその真意を明らかにすることができるものとする。

今回の研修旅行では、『ラス・メニーナス』が展示されているプラド美術館を訪れ、ベラスケスの作品や有名・無名作家を含めた多くの絵画を広く観察することができた。また、プラド美術館があるスペインの首都、マドリード市内には他にもいくつかの美術館が肩を並べていた。スペイン絵画を初め、多数の絵画が収蔵されていたので、ソフィア王妃芸術センターと王立サン・フェルナンド美術アカデミーとさらにもう2つの美術館にも足を運び、『ラス・メニーナス』との比較による何か発見が得られるのではないかと考えながら見学をした。

マドリッド以外にもトレドとセビリヤの地を訪れた。トレドは16世紀スペインを代表するギリシャ人画家、エル・グレコが愛した町で、彼が残した数々の名作は同じスペインで活躍したベラスケスと比較してみる価値があるのではないかと思った。そしてセビリヤはベラスケスが生まれ育った街である。その街並みは当時と異なるものになってしまっているが、古くから残されている建造物やセビリヤという街の雰囲気から、ベラスケスの芸術的感性に影響を与えたものを何か発見できないか、またベラスケスが暮らした街を実際に体感することで、一步でも彼の思いに近づけないだろうかという気持ちで街を探索した。

『ラス・メニーナス』とは一体何で、ベラスケスはどのような思いでこの作品を描いたのか。私は「ベラスケスの人間性」と「鏡の効果」の二つの観点から考察を試みようと思う。

## 1. ベラスケスの人間性

### • セビリヤの街に生まれて

1599年、アンダルシア州の州都セビリヤに生まれ、11歳から義父のパチェーコのもとで絵の勉強に励んだベラスケスは、1623年にフェリペ4世付きの宮廷画家としてその才を振るっていた。そして画家としてだけでなく、役人としての地位も確立し、着々と昇進を重ね、ついには宮廷第三のポストでもある式部長官へと異例の出世を遂げた。以上がベラスケスの辿った人生の極めて簡略したものだが、そもそもマネら近代の画家たちが高く称賛するに至ったベラスケスの感性は、生まれ育ったセビリヤの街と何かしらの関係性があるのだろうか。

闘牛やフラメンコ本場の街、セビリヤは17世紀に経済と文化の両面で繁栄を極め、多くの歴史的遺産が今もなお、街の中にその威厳を保ち続けている。特にスペイン王室の宮殿であるアルカサルは14世紀にペドロ1世の命令により建造されたもので、当初のムデハル様式に加え、ゴシックとルネサンス様式の3つの建築様式が織り成す異世界である。私自身も実際に足を運んだが、宮殿内は、何とも不思議な空気だった。ゴシック建築の特徴である尖頭アーチが見られたかと思うと、次にはムデハル様式特有の幾何学模様が美しくも神秘的に描かれていた。ヨーロッパだけではなく、イスラム文化が混合した美術を幼い頃から肌を感じられたことは、ベラスケスの感性に他国の画家達にはない、独自の美へ対する何らかの判断を生み出したかもしれない。

### • 宮廷画家として

宮廷画家であったベラスケスは宮廷内のあらゆる人々を描いた。その中でも、私が一番着目したのは小人を描いた作品だ。

プラド美術館にはベラスケスだけではなく、エル・グレコやゴヤ、ルーベンス、カラヴァッジョなど、ベラスケス以外のスペイン画家や彼と同じ時代に活躍した他国の画家達の作品が数多く収蔵されている。美術館でベラスケスの間を見学しているとき、明らかに他の画家達と違った点は、この小人達の肖像画である。宗教画や国王、王妃、王女の肖像画など、美しく整えられ、壮さを感じる作品が展示品のほとんどを占めている中で、ベラスケスが描いた小人の絵画は、ぽつんとした寂しさや暗さを帯びながらも、強い存在感を放っていた。数多くあるエル・グレコやゴヤの作品ひとつひとつに美しさや神々しさ、時には恐怖や不気味さを感じることもあったなかで、小人を描いた作品の印象はどの感情にも当てはまらなかった。美術館に展示されていたのは『小人ディエゴ・デ・アセード』(1635

年)や『フランシスコ・レスハーノ』(1640年)、『道化師セバスティアン・デ・モーラ』(1646年)の3作品だった。並べて展示されていたこともあり、その異質な視線に足を止られた私は、この時に初めて『ラス・メニーナス』の作品中に描かれた小人マリア・バルボラの重要性に気付いた。なぜベラスケスは小人達の絵を描いたのか。そして私はここに、ベラスケスという人物の人間性を見ることができると考える。

観る者の視線をぐっと捕まえるベラスケスが描いた小人の絵には、どんな思いが込められているのだろうか。中世ヨーロッパなどでは、宮殿内に宮廷道化師という従者を雇っていて、その名の通り、主人または周囲の人物達を楽しませる役割を担っていた。また、彼らは小人症などの肉体的障害を持っているものが多く、笑い者の対象にされていたと考えられる。宮廷道化師達の肖像は犬と一緒に描かれることが多く、その身分の扱い方が窺える。この傾向は『ラス・メニーナス』からでも見受けられる。ベラスケスは宮廷画家として、国王や王女だけではなく、同じ宮廷内で生きる彼ら道化師にもその芸術的視線を向けたのである。一枚のキャンパスの中に描き出された道化師達の「生」は、鑑賞者をじっと見つめて離さない。ベラスケスが彼らから感じ取ったものは、「生きることへの問いかけ」ではないだろうか。望んで生まれたわけではない不自由な身体であるのに、道化師としてでも生きている彼らとベラスケスは同じ目線で向き合っているのだと思う。宮廷画家である自分に何ができるか、何をすべきか。答えを探しながら筆を取り、今日の私たちにまでも働きかける「生への問い」を描き出したベラスケスは、熾烈な争いが繰り広げられる貴族社会の中でさえも、繊細な道徳的思考を持ち続け、なおかつ、それを真っ直ぐに表現した人々のひとりではないだろうか。それというのも、多様で混合された文化の中で育ったベラスケスだからこそ持ち得た心意気だと考えられる。

- カルデロンにみるベラスケスの生き様

ベラスケスと同じく、17世紀スペインでその名を馳せた劇作家カルデロンは現世の移ろいややすさと信仰の重要性をテーマとした哲学劇『人生は夢』という代表作を残している。セルバンテスが手掛けたスペイン・バロック文学の有名作『ドン・キホーテ』にも見られるように、17世紀スペイン文化の中心的関心事といえ、現実と幻想の関係である。カルデロンは『人生は夢』の中で、この点に関する自身の思いを潜ませている。

「生き甲斐とは何か。熱狂。人生とは何か。それは影、幻影、そして偽り。最も大きな利点もささやかなもの人生。それはただの夢、そして夢すらも夢。」(註1)

時代の変遷に富んだスペイン黄金世紀。急激に、そして多様に移り変わる世の中で人々は己の人生に何を夢見たらう。カルデロンやセルバンテスに見られるように、おそらくベラスケスも「夢」や「人生」に対して何か思いがあったのではないだろうか。宮廷画家として、役人として栄華を極めたベラスケスではあったが、王侯貴族社会で生きていく中で表裏一体な自身の二面性に心を乱されることがあったに違いないと私は考える。その度に自分に問うのは「自分とは何か」、「人生の行き先とはどこか」という自己探求だったのではないだろうか。優美な画風で人の次になるよりも、粗野な画風で一位になりたいという言葉を残したベラスケスは、単純に絵を愛し、画家としての自分なりの個性を大切にしていたと思う。そのような思いを抱きながらも役人としての出世を果たしたベラスケスだが、彼は宮廷に従属したわけではなく、対象を大げさに飾り立てたり英雄的な姿に歪曲したりしなかった。「ありのままの現実を描き抜く」という彼の確固たる信念を胸に、画家としての願望や野心の

追求にその人生を費やしたと私は考える。

「身分と職業と階級、莫大な富と権力と享楽、これらはすべて夢でもあれば宿命でもある。」(註2)

時に人は、欲望や理性の境界を見失い、醜くも己の夢のため眼前の利益に貪欲となることがある。いや、それはすでに醜いという世間が暗黙のうちに植えつけた概念をも打ち破り、更にはその醜さは最もな人間らしさと言えるのではないだろうか。引用したマックス・コメレルの一文から、ベラスケスが芸術的名声と社会的名誉という不釣り合いな二つの榮譽へ導かれるに至った必然性を確信した。

## 2. 自分という鏡を介しての自己探求

### • 鏡の存在位置

真の自分とは何かという問いかけに突き当たったケスは、どのようにして自分自身と向き合ったのか。己を見つめたいと思った時、私達は鏡などに反射し見るほかない。そこで鏡こそがこの疑問を解く鍵だの『ラス・メニーナス』を自分の目で見ること、される位置についてもう一度考え直すこととした。

『ラス・メニーナス』が展示されていた間は大きな形をしており、豪華な額縁に包まれた10点ほどの達を出迎えた。作品達が目の前に現れた時は、円形吸い込まれるような感覚がした。開けた空間に展示したことで、多数の絵画を一望できた。押し寄せてき力というよりは落ち着いた静かな雰囲気という印象だ。というのもベラスケスは一瞬のムードを



たベラス  
ろうか。自  
た自分を  
とし、実際  
鏡あると

な円形の  
絵画が私  
の空間に  
されてい  
そうな迫  
が全体的  
捉えた作

品を描くことに長けていたと言われており、確かに展示されていた絵画は作品中に当時の時間が閉じ込められているスナップ写真のようなものが多かった。『ラス・メニーナス』を目の前にして、画集やコンピュータ上の画像で見てきたものとは、その質感や色目が異なっていると感じた。暗い色が多いにもかかわらず、光が当たっているマルガリータ王女の辺りから明るさが放たれていて、明暗が鑑賞者の無意識のうちにバランスをとっていると思った。また画像で見た時、ベラスケスの視線はマルガリータ王女へと向いているように思えたが、実物の視線に注目してみると、ベラスケスは王女ではなくて、国王夫妻側つまり鑑賞者である私達のほうを見ているように私は感じた。

ここでこの自画像を描くにあたって、なくてはならない鏡の位置を考えたい。そもそも、この『ラス・メニーナス』の構図をベラスケスは絶対的に直視することができないということが明確であるのなら、鏡の物理的位置は私達鑑賞者と同じと思われる。しかし、私が重要視したいのはこの鑑賞者にはベラスケス自身も含まれているという点である。ベラスケスが鑑賞者の一員であるのなら、鏡は必要なくなる。なぜならこの『ラス・メニーナス』の構図を直視できるからである。つまり、モノとしての鏡の存在はどこにもなく、鑑賞者であるベラスケスが鏡の役割を果たしているのではないか。そうすると、自己探求をする上で、自分が何なのかと問いかけるのは自分自身であると解釈できる。それはごく自然で、あるいは当然のことではないだろうか。自分が一体何者なのか、気になっているの

も、その答えを探そうとするのも全ては結局、自分しかいない。ベラスケスはひとつの空間に画家の自分と鑑賞者の自分という同一人物を存在させ、そして前者は後者に問う。「宮廷画家として私が真実であろうか。もしそうであるなら、いや、そうであってほしい、私は真実を描けているだろうか。」物理的な鏡は存在しないことから、画中のベラスケスが描いているものは『ラス・メニーナス』そのものということになる。そしてまた見えないキャンパスに描かれた『ラス・メニーナス』の中のベラスケスが今度は鑑賞者のなった画中のベラスケスに同じく問う。まるで合わせ鏡のように自己探求の連鎖が続いていく。ベラスケスは自己探求が果てしない人の人生における最大にして最難な問いかけだと暗示しているのかもしれない。

- 現実と想像

鑑賞者であるベラスケスを鏡のメタファーとして捉えたことで、現実と想像の問題が発生する。物理的な鏡が存在しないことやベラスケスが鑑賞者の位置に立って鏡の役割を果たしていることなど、どれをとってもこの絵画は根本的に不可能な視点から描かれている。つまり、現実的に『ラス・メニーナス』を描くと考えたとき、ベラスケスはその構図をほとんど想像で描いたか、あるいは鑑賞者の位置にキャンパスを構えながらも、画中に自分を想像で登場させたかのどちらかであると考えられる。鏡を何にしたとしても、鏡に映った虚像の自分を描くそれが、想像そのものであるがゆえに、『ラス・メニーナス』は現実と想像が織り成す異次元という捉え方もできるのかもしれない。

### 3. 『ラス・メニーナス』とは

宮廷画家と役人としての自分を抱え、貴族社会を生き抜いたベラスケス。宮廷で目の当たりにした全てをありのまま表現しようとした彼の繊細な心は、二面性を持つ自身の心に問いかけたくなつたのかもしれない。私とは何で、行き着く先は何なのか。肖像画という手段を用い、鏡を介しての自己探求を試みたベラスケスは自分自身を鏡とし、その姿形ではなく、自分の存在意義を自分に求め、その答えすらも自分の中に見出そうとしたのではないだろうか。そして、鏡である自分が映し出しているのは、宮廷での何気ない日常のワンシーン。国王夫妻に会いに来たマルガリータ王女と女官達であった。『ラス・メニーナス』はベラスケスにとって自己探求そのものであり、問い掛けやその答えでもあると私は考える。

もしかすると、『ラス・メニーナス』は鑑賞者全ての自画像でもあるかもしれない。自分という鏡で映し出したことで生まれた合わせ鏡のような螺旋の自己探求に迷い込んだ鑑賞者達を『ラス・メニーナス』の内側にいる王女や女官達は真の自分とは何かという追求の答えであり、ゆるぎないただひとつの真実なのではないだろうか。

註1 カルデロン『人生は夢』、佐竹謙一訳、1949年出版

註2 マックス・コメレル『カルデロンの芸術』、岡部仁訳、1989年出版

#### <参考文献>

大高保二郎編集『NHKプラド美術館2——宮廷画家の夢、ベラスケス』、1992年出版

エミリオ・オロコス『ベラスケスとバロック精神』吉田彩子訳、1983年出版

【報告書②】

( 徳永 悠の報告書 \*絵画写真の出典明記後 掲載 )

【報告書③】

( 森 紫央里の報告書 \*絵画写真の出典明記後 掲載 )

【報告書④】

( 萩野 栞の報告書 \*絵画写真の出典明記後 掲載 )